

一般人が持つ精神障害者に対するスティグマ

北村愛結美¹⁾

要旨 本研究の目的は、一般人の世代間で「障害者に対するスティグマ」の意識の差を比較することである。方法は、一般の人たちが持つ精神障害者に対するスティグマを「精神障害者に対する社会的距離」と「精神障害に対するイメージ」という面から質問紙調査を行ない、若者世代（10歳代～20歳代）9名と高齢者世代（60歳以上）9名の2群での比較検討を行った。その結果、精神障害者に対する社会的距離尺度（Social Distance Scale-Revised version：SDS-R）では、SDS-Rの総合点および下位の質問項目3項目で、若者世代の方が、高齢者世代よりも社会的距離が有意に高かった。また、若者世代に比べて、高齢者のほうが精神障害者を役立たないあるいは冷たいというネガティブなイメージを持っている傾向が認められた。その要因として、高齢者世代は精神障害者を知る機会が少ないためだと思われる。また、身体障害者の場合は、パラリンピックやユニバーサルデザインなどを学校教育やメディアなどを通して理解できるが、精神障害者に対する情報を得る機会が少ないため、精神障害者に対するスティグマが強いのではないかと考えられた。

Key words：精神科イメージ スティグマ，一般人

I. はじめに

著者は、精神科や高齢者介護などに興味があり、リハビリテーションの分野に進学した。しかし、この分野に進学することに対して、親族からの反対の意見が多くあった。その反対意見の背景には、障害者に対する偏見や差別があることが伺われた。

障害者に対する偏見やスティグマは、障害者に対する差別につながるだけでなく、障害者の社会参加や社会生活の妨げとなる場合も多い¹⁾。そこで今回、卒業論文として「精神障害者に対するスティグマ」を研究することにした。偏見やスティグマを調査していく過程で、偏見やスティグマがその対象（者）に関する認知度の低さが関係していると思われた。また、これらの負のイメージは世代間で異なることが伺われた¹⁾。

したがって、本研究の目的は、特に認知度が低いと思われる精神障害者について、偏見やスティグマの世代間の差を検討することとした。

II. 方法

一般の人たちが持つ精神障害者に対するスティグマを、「精神障害者に対する社会的距離」と「精神障害に対するイメージ」という面から調査を行ない、若者世代（10歳代～20歳代）と高齢者世代（60歳以上）の2群での比較検討を行った。

1. 対象

対象は、佐賀県K町に在住の13歳から95歳まで36名（女性23名、男性13名）である。平均年齢（平均±標準偏差）は54.9±26.5歳（女性56.2±29.3歳、男性52.2±21.6歳）であった。

2. 調査内容

調査は、以下の質問用紙を一斉配布・回収によって行った。説明を行い、同意を得た対象者のうち若者と高齢者を比較した。

受付日：令和3年11月1日、採択日：令和3年12月1日

1) 西九州大学 リハビリテーション学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻

※連絡先：〒842-8585 佐賀県神埼市神埼町尾崎4490-9 西九州大学リハビリテーション学部 作業療法学専攻 原口研究室 (Tel: 0952-37-9304)

a. 質問紙内容

①精神障害者に対するイメージ調査

精神障害者に対するイメージの測定には、星越ら¹⁾が開発した「精神障害者に対するイメージ調査（20項目）から9項目を選択して用いた山中ら²⁾」の作成したイメージ調査（表1）を用いた。

この評価は、「精神障害に対する印象」について、7段階の Visual Analogue Scale (VAS) で回答を得るものであり、精神科の看護分野やリハビリテーション分野で幅広く用いられている。

表1 精神障害者に対するイメージ尺度

Q	1	2	3	4	5	6	7	
Q 1 陽気な	1	2	3	4	5	6	7	陰気な
Q 2 暗い*	1	2	3	4	5	6	7	明るい
Q 3 役立つ	1	2	3	4	5	6	7	役立たない
Q 4 冷たい*	1	2	3	4	5	6	7	温かい
Q 5 良い	1	2	3	4	5	6	7	悪い
Q 6 危険な*	1	2	3	4	5	6	7	安全な
Q 7 迷惑な*	1	2	3	4	5	6	7	迷惑でない
Q 8 怖くない	1	2	3	4	5	6	7	怖い
Q 9 汚い*	1	2	3	4	5	6	7	きれいな

※Q 2, Q 4, Q 6, Q 7, Q 9は逆転項目。

②精神障害者に対するスティグマの調査

「精神障害者に対するスティグマ」の測定は、社会的距離尺度 (Social Distance Scale-Revised version : SDS-R) の8つの質問 (表2) を活用した。

SDS-Rは、精神障害者 (統合失調症者) に対するスティグマを、「精神障害者に対する社会的距離」という面から8つの質問で評価する尺度であり、久留米大学医学部精神神経科学教室で開発された³⁾。SDS-Rは、4段階 (0~3点) のLikert法で回答をえるもので、社会的距離が遠いほど得点が高くなるように設定され、牧田³⁾によって信頼性と妥当性が検証されている。

b. 倫理的配慮

調査に際しては、対象者に対する研究の趣旨説明と研究方法の説明、得られたデータの使用目的と管理方法、および個人情報の漏洩に関する対処などの説明を行った。また、調査は、対象者に対する一斉配布・一

表2 : 社会的距離尺度 (SDS-R)

sds 1	精神科に入院していた事のある人とは付き合わない方が一番である
sds 2**	精神障害を患った事のある人々を避けるのは間違いである
sds 3	精神科に入院した事のある人と近所で暮らす事になったら、自分にとって苦になると思う
sds 4	私は、精神障害を患った事のある人が運転するタクシーに乗りたくない
sds 5	私は、精神障害で入院していた人は雇いたくない
sds 6	精神障害を患った事のある教師は、学校で教えることを許可されるべきではない
sds 7**	私は、ベビーシッターを雇うとき、精神障害の女性であっても構わない
sds 8	もし、自分の娘が精神障害を患った事のある人と結婚したいと言ったならば、娘がどうであれ私は結婚に反対するであろう

※各質問に対して「そう思う」~「そう思わない」までの4段階のリッカート尺度で回答をとる。Q 2とQ 7は逆転項目

表3 対象 (若者世代・高齢者世代) の属性

	若年世代 n=9	高齢世代 n=9	p 値 ^{a)}
平均年齢	19.89±5.56	71.44±8.81	<.001
性別			1.000
男性 (人)	3	3	
女性 (人)	6	6	
遭遇経験			.690
有 (人)	6	6	
無 (人)	3	3	
職業			.001
学生 (人)	6	0	
社会人 (人)	3	2	
その他 (人)	0	7	

a) 平均年齢は Mann-Whitney の U 検定, 他は χ^2 乗検定および Fisher exact test, p<0.05

b) 定年後の無職を含む

表4 精神障害者に対するイメージ調査の比較

	若者世代 n=9	高齢世代 n=9	p 値
合計点	34.44±7.07	35.33±4.53	.227
第一因子 (親しみやすさ)			
問 1	4.22±1.64	3.56±0.57	.168
問 2	4.44±1.51	3.89±0.93	.338
問 3	3.22±1.20	4.22±1.09	.067 [†]
問 4	3.00±1.50	4.22±1.09	.073 [†]
問 5	3.33±0.87	3.78±0.97	.264
問 6	4.56±1.01	3.89±1.17	.272
第二因子 (普通さ)			
問 7	4.00±1.00	3.67±1.00	.364
問 8	4.11±1.83	4.00±1.23	.752
問 9	3.56±1.59	4.11±1.17	.646

a) Mann-Whitney の U 検定, [†]: 0.05<p<0.10

b) 数値は、平均値±標準偏差

斉回収で行うとともに、回答の提出を持って調査に対する同意の有無を確認した。

c. 統計解析

データの解析は、IBM SPSS Statistics 22を用い、統計解析の有意水準を5%とした。

III. 結果

1. 対象属性

調査および集計の結果、有効な回答が得られたのは18名で（有効回答率75.0%）あり、若者世代は9名、高齢者世代は9名であった（表3）。精神障害者との遭遇・接触経験に両群間に有意差は認められなかった（ $p=0.690$ ）。

2. 精神障害者に対するイメージ調査の結果（表4）

精神障害者に対するイメージ調査では、若者世代と高齢者世代の回答に有意差は見られなかった。しかし、第一因子である「親しみやすさ」の2項目（問3と問4）で、高齢者世代よりも若者世代の方に少し有意差があった。問3の「役立つ-役立たない」と問4の「冷たい-温かい」の質問項目で高齢者のほうが精神障害者を役立たないあるいは冷たいというネガティブなイメージを持っている傾向が認められた。

3. 社会的距離尺度の調査結果（表5）

対象者に対する社会的距離尺度では、SDS-Rの総合点および下位の質問項目sds3, 4, 8の3項目で、若者世代の方が、高齢者世代よりも社会的距離が有意に高かった（それぞれ、 $p=0.005$, $p=0.019$, $p=0.039$, $p=0.007$ ）（表5）。

表5 社会的距離尺度（SDS-R）の比較

	若者世代 n = 9	高齢者世代 n = 9	p 値 ^a
SDS 全体 ^b	15.00±2.65	10.00±3.64	.005*
sds 1	2.22±0.44	1.89±0.93	.458
sds 2	1.78±0.97	1.11±1.05	.169
sds 3	2.22±0.67	1.33±0.71	.019*
sds 4	1.33±0.71	0.56±0.73	.039*
sds 5	2.00±0.87	1.33±1.00	.166
sds 6	2.00±1.00	1.78±1.09	.645
sds 7	1.44±0.88	1.44±1.01	.812
sds 8	2.00±1.00	0.56±0.73	.007*

a) Mann-Whitney の U 検定, * $p<0.05$

b) 数値は、平均値±標準偏差

IV. 考察

1. 精神障害者に対するイメージについて

精神障害者に対するイメージは、高齢者の方がネガティブに捉えていることが示唆された。その背景として、以前は、「精神障害者は社会不適合者だ」と判断し、隔離施設に収容し、一般人が直接関わることがないことが原因だと考えられた。

現在では、精神障害者もリハビリテーション活動によって社会復帰が可能になり、精神障害者との接触の機会も経験できるようになってきた。しかし、高齢者世代は、日本の精神障害者の収容主義によって、長年精神障害を知る機会ほとんど無かったであろうと思われる。そのため、アルコール依存症や薬物依存、うつ病などの精神疾患の一部疾患だけで判断する人が多く、間違った印象を受けている人も多くいるのではないかと思われる。その結果、高齢者世代が持つ精神障害者に対する負のイメージに繋がったのではないかと考える。

2. 精神障害者に対するスティグマについて

精神障害者に対するスティグマは、若者世代のほうが強かった。その要因の一つは、精神障害者を知る機会がないからだと考える。身体障害者に関しては、パラリンピックやユニバーサルデザインなどを学校教育やメディアなどを通して理解する機会があるが、精神障害者に対する情報を得る機会は比較的少ない。そのため、精神障害者に対するスティグマが強いのではないかと考えた。

著者自身も、精神障害という病気を詳しく勉強するまでは精神障害者に対する偏見やスティグマをいだいていた。しかし、専門的な勉強を行い、精神科病院での実習経験により、精神障害についての理解が深まったと思われる。

精神障害者に対する偏見やスティグマをなくすためには、病気を知ることと、誰もがなる病気だと理解する事が大切だと考える。一般人の精神障害についての理解が深まることで、精神科の病院にも訪問しやすい環境になり、精神障害者の早期発見・早期治療にも繋がるとと思われる。また、精神障害者も社会復帰がしやすく、住みやすい世の中になることが期待される。

3. 本研究の限界と課題

本研究では、対象者はそれぞれ9名で、有効回答率は75.0%であった。高齢者と若者の世代別に分け比較

したところ、イメージ調査で有意差が出にくかったのは、対象人数が少数であるからだと考える。そのため今後は、研究の対象人数を増やし、多くの世代での比較検討をする必要がある。また、世代別だけでなく職業別や精神障害者との接触経験の有無なども考慮した比較検討を行う必要もあると思われる。

V. 謝 辞

本研究に快く参加していただきました佐賀県K町在住の皆様にお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 星越・洲脇・寛成：精神要因勤務者の精神障害者に対する社会的態度. 日社精医誌 2：93-104, 1994
- 2) 山中・森永・古川：精神障害者に対する偏見の研究. 広島大学心理学研究 第17号 2017
- 3) 牧田潔：統合失調症に対する社会的距離尺度（SDSJ）の作成と信頼性の検討. 日本社会精神医学雑誌 第14巻第5号：231-241, 2006.